北パキスタン諸言語のコピュラ

吉岡　乾

国立民族学博物館

1　はじめに

本論文では、パキスタン北部で用いられている幾つかの言語におけるコピュラの、振る舞い上の相同相異を明らかにする。結論としては、有生性での区別と地理的・系統的な近さが相関関係にある点と、否定において幾つかのカテゴリが中和する現象がブルシャスキー語を中心に分布している点を示す。

2　本稿で扱う言語

ここで扱う言語は、以下の 6 言語である：カティ語、カラーシャ語、コワール語、シナー語、ドマーキ語、ブルシャスキー語。ブルシャスキー語に関しては主に、5 節で 3 つの方言の差に関して扱う。各言語の地理的分布に関しては、次ページの個別言語分布図（図 1～図 6）と、その次の全体図（図 7）を参照されたい。

・印欧語インド・イラン語派ヌーリスタン諸語[1]：
　カティ語 Kt

・印欧語インド・イラン語派ダルド語群[2]：
　カラーシャ語（ルンブール方言）Kl、コワール語（イシュコマン方言）Kw、
　シナー語（ギルギット方言）Sh

・印欧語インド・イラン語派インド語派中央インド語派[3]：
　ドマーキ語（モミナバード方言）Dm

・系統的孤立語：
　ブルシャスキー語（東ブルシャスキー語 EB（フンザ方言 BH、ナゲル方言 BN）、
　西ブルシャスキー語 WB（ヤスィン方言 BY））

---

[1] ヌーリスタン諸語に関して最近は、インド・イラン語派には括られつつも、インド語派、イラン語派と並ぶ位置に置かれる傾向にある（Morgenstierne 1974 など）。ダルド語群と系統的に近いと考えられていたことや同一視されていたこともあったが（Grierson 1906 など）、Morgenstierne（1926）は截然と、二者が別物であると述べている。その分類史は Edelman（1983）に詳しい。

[2] ダルド語群に関しては、インド語派の下位であると考えるのが今では主流である。但し、曾てはヌーリスタン諸語と同様に、インド・イラン語派内の位置付けで議論があった程度に、質的な特異性を持っているグループである（Grierson 1919、Varma 1978 など）。

[3] 今でも Вайнрайх（2011）などは、ドマーキ語をダルド語群と関連付けて示している。Morgenstierne（1973 [1947]: 232）でもダルドとされていたが、Morgenstierne（1974）では外されている。

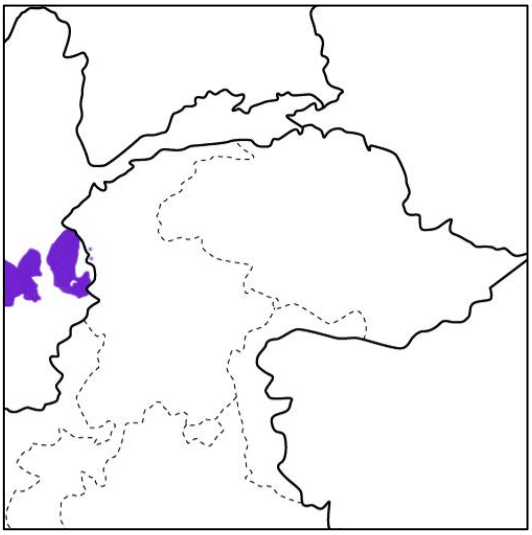

図 1：カティ語

図 2：カラーシャ語

図 3：コワール語

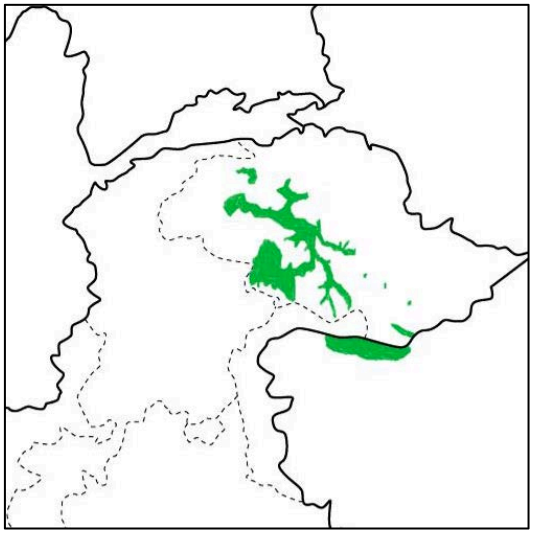

図 4：シナー語

図 5：ドマーキ語

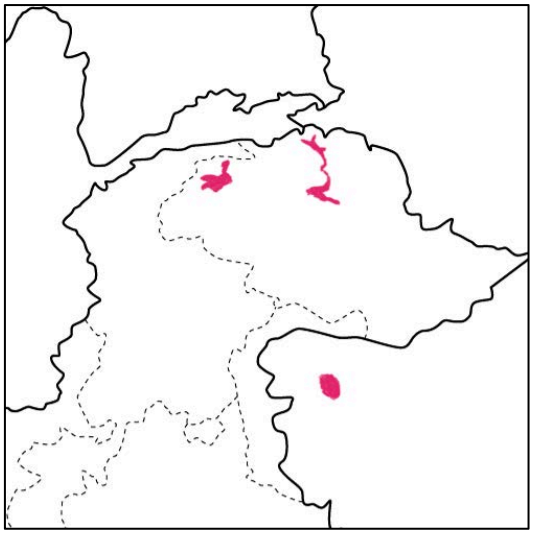

図 6：ブルシャスキー語

図 7：6 言語分布図

これらはいずれも、SOV 語順の膠着語である。いずれの言語でも、形容詞は名詞的な扱いを強く受けている。

カティ語、カラーシャ語、コワール語には名詞クラスがなく、シナー語、ドマーキ語には 2 つ（男性・女性）、ブルシャスキー語には 4 つ（ヒト男性・ヒト女性・具象物・抽象物）の名詞クラスがある。

なお、本稿で用いるデータは特筆がない限り、全て筆者が現地調査で得たものである。

3　コピュラの同定

本稿では、類型的な裏付けの上で、A=B 文を作る際に節内に現れて、主部と人称・数・クラスなどのカテゴリで一致を果たし、TAM を標示するために用いられることのある要素をコピュラと見做した。[4]　言語によって、コピュラが全く動詞的に活用するか、動詞とはやや異なった活用をするかには違いがある。

[4] 本稿では形容詞述語コピュラ文を分析の基礎としたが、これはこの文が共通して並行的に取れている例文だったからである。本稿で対象としている言語のいずれでも、形容詞述語文の他に、A=B 文（指定分、措定文）、存在文、所有者場所表現を伴った所有文（「X の所に Y がある」、即ち、「X は Y を所有する」）などが、一律、コピュラを用いた文で表現される。

(1)	Ur	*ye*	*laṛkī*	*aččhī*	*hē*
		ye	laṛkī	ačč̌h-ī	h-ē̃
		これ	少女	良い-F	COP:NPST-3SG
		この少女は良い			

パキスタンの国語であるウルドゥー語の例(1)では、文末にある *hē*が、主部である *ye laṛkī*「この少女」と人称・数で一致を果たしており、叙述形容詞 *aččhī*「良い」に伴うことで述部を構成しているコピュラである。

以下、各言語での同意の文例である。多少、用いられている要素の異なりや、分析の違いはあるが、いずれもコピュラ文はウルドゥー語の(1)と並行的な様相を見せている。

(2)	Kt	*iné*	*juk*	*last*	*asə́*
		iné	júk	lást	as-ə
		これ	少女	良い	COP-3SG
		この少女は良い			

(3)	Kl	*ía*	*kúa·k*	*pruṣṭ*	*ásaw*
		ía	kúa·k-Ø	prúṣṭ	ás-w
		これ	少女-NOM	良い	COP:ANI-PRS:3SG
		この少女は良い			

(4)	Kh	*hayá*	*kumóru*	*jam*	*asúr*
		hayá	kumóru-Ø	jám	as-r
		これ	少女-NOM	良い	COP:ANI-NPST:3SG
		この少女は良い			

(5)	Sh	*ée*	*muláay*	*míšto*	*han*
		ée	muláay-Ø	míšto	hán-Ø
		この:F	少女-ABS	良い	COP-3
		この少女は良い			

(6)	Dm	*aṣáay*	*jóṭi*	*šooní*	*čhi*
		aṣáay	jóṭi-Ø	šoon-i	čh-i
		これ:F	少女-ABS	良い-F	COP-INTR:3SG.F
		この少女は良い			

(7) EB

khiné	*dasín*	*šuáan*	*bo*
khiné	dasín-Ø	šuá-an	bá-o-Ø
これ:H	少女-ABS	良い-INDF.SG	COP-3SG.HF-NPRS

この少女は良い

(8) WB

khomó	*dasín*	*šuáan*	*bu*
khomó	dasín-Ø	šuá-an	bá-u-Ø
これ:HF	少女-ABS	良い-INDF.SG	COP-3SG.HF-NPRS

この少女は良い

これらの、独立して用いられる直説法のコピュラの形式を次節以降で総覧する。

4　各印欧語のコピュラのパラダイム

ここでは、各言語のコピュラ直説法定形のパラダイムを示す。肯定形現在、肯定形過去、否定形現在、否定形過去の順に並べた。なお、パラダイム理解の便宜のため、必要に応じて例文を後置した。

本節では印欧語のみを対照し、ブルシャスキー語に関しては次節で述べる。

4.1　カティ語

カティ語のコピュラは、不定詞は *bú-stə* という形式だが、定活用形では補充法で *as-*という語根が現れる。（ペルシア語の *bū-dan* と *hast-*などと同様）

表 1：カティ語の直説法コピュラ

	肯定・現在		肯定・過去		否定・現在		否定・過去	
	SG	PL	SG	PL	SG	PL	SG	PL
1	*asúm*	*asə́miš*	*asyúm*	*asímiš*	*naasúm*	*naasə́miš*	*naasyúm*	*naasímiš*
2	*εsíš*	*asə́ə*	*asíiš*	*asíš*	*nεεsíš*	*naasə́ə*	*naasíiš*	*naasíš*
3	*asə́*	*aí*	*asíi*	*así*	*naasə́*	*naaí*	*naasíi*	*naasí*

過去形は現在形語幹に*-y-*という接尾辞が付加しているものだと思われる。

否定形は現在も過去も、接頭辞 *na-*で作られている。これは一般動詞と同じ手法である。

4.2　カラーシャ語

カラーシャ語のコピュラは、3 人称で有生物主語か無生物主語かの異なりを反映している。有生物コピュラは *ás-ik*、無生物コピュラは *š-ik* が不定詞形である。カティ語の *bú-stə* に対応する形式は *h-ik*「なる、である」。

表 2：カラーシャ語の直説法コピュラ

		肯定・現在		肯定・過去		否定・現在		否定・過去	
		SG	PL	SG	PL	SG	PL	SG	PL
1	ANI	*ásam*	*ásik*	*ásis*	*áimi*	*ne ásam*	*ne ásik*	*ne ásis*	*ne áimi*
2	ANI	*ásas*	*ása*	*ái*	*áili*	*ne ásas*	*ne ása*	*ne ái*	*ne áili*
3	ANI	*ásaw*	*ásan*	*áis*	*áini*	*ne ásaw*	*ne ásan*	*ne áis*	*ne áini*
	INA	*šiw*	*šíen*	*ašís*	*ašíni*	*ne šiw*	*ne šíen*	*ne ašís*	*ne ašíni*

(9) Kl *ía* *ḍa* *pruṣṭ* *šiw*
ía ḍá-Ø prúṣṭ š-w
これ ワイン-NOM 良い COP-PRS:3SG
このワインは良い

カラーシャ語では現在と過去とで人称接尾辞が別系統になり、有生コピュラ現在には一般動詞の未来人称接尾辞（*-m*, *-s*, *-w* など）、コピュラ過去には一般動詞の過去人称接尾辞（*-is*, *-i*, *-aw* など）が、語幹 *ás-*と共に用いられている[5]。3 人称単数過去の *á-is* は不規則変化、或いは現在形との同音衝突を回避した形式だろうか。無生コピュラでは語幹が現在 *š-*と過去 *a-š-*とで異なっており、人称接尾辞は一般動詞未来のものが共通して用いられている。

否定形は一般動詞と同様に、*ne* を前置して表現している。

4.3 コワール語

コワール語のコピュラは、3 人称で有生物主語か無生物主語かの異なりを反映している。有生物コピュラは *as-ík*、無生物コピュラは *š-ik* が不定詞形である。但し、助動詞コピュラでは有生物でも *š-*系の語形が用いられる場合がある（1・2 人称でも）。カティ語の *bú-stə* に対応する形式は *b-ik*「なる、である」。

表 3：コワール語の直説法コピュラ

		肯定・現在		肯定・過去		否定・現在		否定・過去	
		SG	PL	SG	PL	SG	PL	SG	PL
1	ANI	*asúm*	*asúsi*	*astám*	*astám*	*no asúm*	*no asúsi*	*no astám*	*no astáam*
2	ANI	*asús*	*asúmi*	*astáo*	*astámi*	*no asús*	*no asúmi*	*no astáo*	*no astáami*
3	ANI	*asúr*	*asúni*	*astáy*	*astáni*	*no asúr*	*no asúni*	*no astáy*	*no astáani*
	INA	*šer*	*šéni*	*ošóy*	*ošóni*	*néki*		*néki*	

[5] 過去形で 1 人称単数以外の語幹が *a-*になっているが、*as-*が保たれている形式の記録もある（Trail & Cooper 1999: 15）。Trail & Cooper（1999）はブンブレット谷方言を中心としつつルンブール谷方言・ビリール谷方言も記述している辞書であり、未詳の方言差という可能性も考えられる。

(10) Kh *hayá* *ren* *jam* *šer*
hayá rén-Ø jám š-r
これ ワイン-NOM 良い COP-NPST:3SG
このワインは良い

コワール語では現在と過去とで人称接尾辞が別系統になり、有生コピュラ現在には一般動詞の非過去人称接尾辞（*-m*, *-s*, *-r/y*[6]など）が語幹 *as-*と共に、コピュラ過去には一般動詞の過去人称接尾辞（*-am*, *-ao*, *-ay* など）が語幹 *as-t-*と共に、用いられている。無生コピュラでは語幹が現在 *š-*と過去 *o-š-*とで異なっており、人称接尾辞は一般動詞未来のものが共通して用いられている。

否定形は有生コピュラの場合は一般動詞と同じように、前に否定辞 *no* を付けて表現されている。無生コピュラの場合は単複の区別も現在・過去の区別も消失し、(11)・(12)にあるように、*néki* という形式で一括して表現されるようになる。

(11) Kh *hayá* *ren* *jam* *néki*
hayá rén-Ø jám néki
これ ワイン-NOM 良い COP.NEG
このワインは良くない

(12) Kh *ma* *gona* *hame* *ketap* *naki* [7]
má gón-a hamít ketáp-Ø néki
私:GEN 所(?)-LOC これら 本-NOM COP.NEG
私はこれらの本を持っていなかった（／いない）

カラーシャ語と対比すると、無生物コピュラの否定形に関してのみ大きく異なっている。即ち、カラーシャ語が到って規則的に否定形を形成するのに対して、コワール語は中和が部分的に起こっている点が顕著である。

4.4 シナー語

シナー語のコピュラでは、単数形で性（名詞クラス）の異なりによる形式差が出て来る。コピュラの不定詞は *bo-ók* という形式であるが、定形では補充法で *hán-*や *as-*といった語根が現れている。

---

[6] 異形態の出現条件は、*-r*／{*i*, *u*, *e*}_ と、*-y*／{*a*, *o*}_ か。

[7] この例文に関しては Facebook のチャット機能で聞き取りをした為、表記を話者の用いた綴りそのままにしてある。調査日は 2014 年 12 月 1 日、協力者は Asīf Zamān。

表 4：シナー語の直説法コピュラ

<table>
<tr><th></th><th colspan="2">肯定・現在</th><th colspan="2">肯定・過去</th><th colspan="2">否定・現在</th><th colspan="2">否定・過去</th></tr>
<tr><th></th><th>SG</th><th>PL</th><th>SG</th><th>PL</th><th>SG</th><th>PL</th><th>SG</th><th>PL</th></tr>
<tr><td>1 M</td><td>hánus</td><td rowspan="2">hánas</td><td>asúlus</td><td rowspan="2">asúles</td><td colspan="2" rowspan="6">nuš</td><td>ne asúlus</td><td rowspan="2">ne asúles</td></tr>
<tr><td>F</td><td>hánis</td><td>asílis</td><td>ne asílis</td></tr>
<tr><td>2 M</td><td>hánoo</td><td rowspan="2">hánat</td><td>asúloo</td><td rowspan="2">asúlat</td><td>ne asúloo</td><td rowspan="2">ne asúlat</td></tr>
<tr><td>F</td><td>hányee</td><td>asílee</td><td>ne asílee</td></tr>
<tr><td>3 M</td><td colspan="2" rowspan="2">han</td><td>asúlo</td><td rowspan="2">asíle</td><td>ne asúlo</td><td rowspan="2">ne asíle</td></tr>
<tr><td>F</td><td>asíli</td><td>ne asíli</td></tr>
</table>

コピュラの 1･2 人称に関しては、現在･過去に関わらず、一般動詞の人称接尾辞（*-us* (1SG.M), *-is* (1SG.F), *-oo* (2SG.M), *-yee* (2SG.F)など）が用いられている。一方で、3 人称に関しては、過去は一般動詞同様に*-o* (M), *-i* (F), *-e* (PL)が用いられているが、現在では一切用いられていない。即ち、現在形では 3 人称が単複、男女、いずれにおいても、*han* という形式に中和しているように見える[8]。但し、3 人称肯定現在が中和したようになるのはコピュラだけに限らず、子音終わり語幹の自動詞だと人称接尾辞が落ちることが間々あるようだ。次の(13)と表 5 を参照されたい（(13)では子音終わりではないようにも見えるが、最後の *e* は活用を見ると添加音であるようだ）。

(13) Sh {*anú* / *aní* / *ané*} *áã́* *áale*
anú aní ané áã́ aa-l-Ø
これ:M これ:F これら ここ 来る-PFV-3
｛彼／彼女／彼ら｝がここに来た

表 5：シナー語の自動詞の単純過去形

<table>
<tr><th></th><th colspan="2">「来た」</th><th colspan="2">「死んだ」</th></tr>
<tr><th></th><th>SG</th><th>PL</th><th>SG</th><th>PL</th></tr>
<tr><td>1 M</td><td>áalus</td><td rowspan="2">áalas</td><td>múus</td><td rowspan="2">múas</td></tr>
<tr><td>F</td><td>áalis</td><td>múis</td></tr>
<tr><td>2 M</td><td>áaloo</td><td rowspan="2">áalat</td><td>múo</td><td rowspan="2">múat</td></tr>
<tr><td>F</td><td>áalyee</td><td>múye</td></tr>
<tr><td>3 M</td><td colspan="2" rowspan="2">áale</td><td>múu</td><td rowspan="2">múe</td></tr>
<tr><td>F</td><td>múi</td></tr>
</table>

[8] Schmidt & Kohistani（2008）を見ると、インダス・コーヒスタン方言では中和していない。

従って、子音終わりの語幹 *hán-*の場合には、そもそも 3 人称では単複、男女同形になるのだと考えられる。

シナー語で更に目立つのが、コピュラ否定現在形の中和である。(14)のように 3 人称単数女性であろうが、(15)のように 1 人称複数であろうが、何人称何数であっても、否定の現在は *nuš* という形式になる。コワール語で、3 人称無生物が否定形で単複や時制の違いを失っていたのとは、「否定における中和」としては共通しているが、中和の範囲が異なっている。

(14) Sh *ée* *muláay* *míšto* *nuš*
ée muláay-Ø míšto núš
この:F 少女-ABS 良い COP:PRS.NEG
この少女は良くない

(15) Sh *be* *míšto* *nuš*
bé míšto núš
私たち:ABS 良い COP:PRS.NEG
私たちは良くない

否定の過去形に関しては、肯定形に否定辞 *ne* を付加しただけの、シンプルな形をしている。

4.5 ドマーキ語

ドマーキ語のコピュラでは、3 人称単数形でのみ性（名詞クラス）の異なりによる形式差が出て来る。コピュラの不定詞は *hu-iná* という形式であるが、定形では補充法で *čh-*という語根が現れている。

表 6：ドマーキ語の直説法コピュラ

<table>
<tr><th></th><th colspan="2">肯定・現在</th><th colspan="2">肯定・過去</th><th colspan="2">否定・現在</th><th colspan="2">否定・過去</th></tr>
<tr><th></th><th>SG</th><th>PL</th><th>SG</th><th>PL</th><th>SG</th><th>PL</th><th>SG</th><th>PL</th></tr>
<tr><td>1</td><td>čhíis</td><td>čhóom</td><td>čhíisaka</td><td>čhóomaka</td><td colspan="2" rowspan="4">náa</td><td colspan="2" rowspan="4">náaka</td></tr>
<tr><td>2</td><td>čháay</td><td>čhóot</td><td>čháayaka</td><td>čhóotaka</td></tr>
<tr><td>3 M</td><td>čha</td><td rowspan="2">čhe</td><td>čháaka</td><td rowspan="2">čhéeka</td></tr>
<tr><td>F</td><td>čhi</td><td>čhíika</td></tr>
</table>

肯定現在形に関しては、語根 *čh-*に一般自動詞の完了人称接尾辞が付けられているのみである。過去形は、現在形に非現実接尾辞*-aka* が後接されて形成されている。この接尾辞は一般動詞では、(16)の文末にあるような、反実仮想表現にのみ用いられる。なお、コピュラ過去形はコピュラ反実仮想形でもある。

(16) Dm *mas* *páa* *rupaié* *čhéekata,* *u*
m-as páa rupaié-Ø čh-e-aka=ta ú-Ø
私:OBL-INS.SG ところ お金-ABS COP-INTR:3PL-IRR=CONJN 私-ABS
háay *gaarí* *γaṣás* *léesaka*
háay gaarí-Ø γaṣ-as le-is-aka
これ:F 車-ABS 売買-INS.SG 取る-INTR:1SG-IRR
もしも私にお金があったなら、この車を買っていた

シナー語が現在形の否定が中和していたのみであったのに対し、ドマーキ語は過去形の場合も、中和した否定現在形＋*-aka* で形成されており、実質的に人称・数・性の中和が起こっている。

(17) Dm *aṣéŋ* *jóṭiŋa* *šooné* *náaka*
aṣéŋ jóṭi-ŋa-Ø šoon-e náa-aka
これら 少女-PL-ABS 良い-PL COP:NEG-IRR
この少女たちは良くなかった

なお、ドマーキ語の一般定形動詞の否定は、否定辞 *ni* を前接させて形成される。

4.6 北パキスタンの印欧語のまとめ

本節では、各印欧語のコピュラのパラダイムを概観した。表 7 にそれぞれの語形、有生性による区別の有無、中和の起こる領域をまとめた。言語順は、地理的に西から東への並びになっている。参考までに、言語系統としてヌ（ーリスタン諸語）、ダ（ルド語群）、印（ド語派）も明記した。

表 7：北パキスタンの印欧語のコピュラ

言語名	語形				有生性の区別	中和の範囲(人称；3 人称/All)				系統
	不定詞	現在	過去	否定辞		肯現	肯過	否現	否過	
Kati	*bú-stə*	*as-*	*as-y-*	*na-*	×	——	——	——	——	ヌ
Kalasha	*ás-ik* *š-ik*	*ás-* *š-*	*ás-* *a-š-*	*ne=*	○	—— ——	—— ——	—— ——	—— ——	ダ
Khowar	*as-ík* *š-ik*	*as-* *š-*	*as-t-* *o-š-*	*no=*	○	—— ——	—— ——	—— 数・時制(3)	—— 数・時制(3)	ダ
Shina	*bo-ók*	*hán-*	*as-l-*	*ne=*	×	——	——	性・数(A)	——	ダ
Domaki	*hu-iná*	*čh-*	*čh-*	(*ni=*)	×	——	——	性・数(A)	性・数(A)	印

全体の傾向を考えると、見たところ、各言語の不定詞（カラーシャ語、コワール語に関しては動詞「なる」の不定詞：Kl *h-ik*、Kh *b-ik*）は共通性があることが窺える[9]。補充法で用いられている定形活用語根に関しても、現在語幹ではカティ語からコワール語まで、過去語幹はカティ語からシナー語までが、共通して *as-*という形式を用いているのが見て取れた[10]。ダルド系言語の中では、西側のカラーシャ語とコワール語が有生・無生でコピュラを使い分けていて、それらが共通して、一般動詞とは異なった過去形の形成をしている点も注目すべきであろう。

一方で、コピュラが中和を見せ始めるのはコワール語より東である。シナー語とドマーキ語は否定で人称・性・数が中和するという点で、共通しているが、反面、コワール語とドマーキ語とが否定の現在でも過去でも中和を見せるという点で共通している部分もある。この中で、ドマーキ語は他のどの言語とも系統的に近くないのに、そういった共通性がある点が興味深い。

5　ブルシャスキー語の名詞クラスとコピュラ

前の節では、北パキスタンの印欧語のコピュラをざっと見比べてみた。そこでは有生・無生の区別や、否定形での中和などが、一部の言語間での共通特徴として観察された。

本節では、ブルシャスキー語の方言間のコピュラを対比してみる。繰り返すが、ブルシャスキー語は名詞クラスでヒト男性(HM)、ヒト女性(HF)、具象物（含 動物）(X)、抽象物(Y)を区別している言語である。

5.1　ブルシャスキー語フンザ方言

ブルシャスキー語フンザ方言のコピュラは、H 類（ヒト＝HM＋HF）は *bá-*、XY 類（モノ）は *b-*という語幹を取る。

表 8：ブルシャスキー語フンザ方言の直説法コピュラ

<table>
<tr><th></th><th colspan="2">肯定・現在</th><th colspan="2">肯定・過去</th><th colspan="2">否定・現在</th><th colspan="2">否定・過去</th></tr>
<tr><th></th><th>SG</th><th>PL</th><th>SG</th><th>PL</th><th>SG</th><th>PL</th><th>SG</th><th>PL</th></tr>
<tr><td>1</td><td>báa</td><td>báan</td><td>báyam</td><td>bam</td><td>apáa</td><td>apáan</td><td>apáyam</td><td>apám</td></tr>
<tr><td>2</td><td>báa</td><td>báan</td><td>bam</td><td>bam</td><td>apáa</td><td>apáan</td><td>apám</td><td>apám</td></tr>
<tr><td>3 HM</td><td>bái</td><td rowspan="2">báan</td><td>bam</td><td rowspan="2">bam</td><td>apái</td><td rowspan="2">apáan</td><td>apám</td><td rowspan="2">apám</td></tr>
<tr><td>HF</td><td>bo</td><td>bom</td><td>apó</td><td>apóm</td></tr>
<tr><td>X</td><td>bi</td><td>bién</td><td>bim</td><td>bim</td><td rowspan="2">apí</td><td>apíen</td><td rowspan="2">apím</td><td>apím</td></tr>
<tr><td>Y</td><td>bilá</td><td>bicán</td><td>bilúm</td><td>bicúm</td></tr>
</table>

[9] サンスクリットの *bhu-*「なる」も参考のこと。
[10] サンスクリットの *as-*「ある」も参考のこと。

肯定現在形は、語幹＋人称接尾辞で構成されており、肯定過去形は、肯定現在形＋非現在接尾辞*-m* で構成されている。3 人称複数 H 類が中和するのは、言語全体での傾向であり、コピュラに特有の現象ではない。

ブルシャスキー語フンザ方言の動詞類の否定は、否定接頭辞 *a-*によって標示される。この接辞は、アクセントを近くへ引き寄せつつ、直後の濁音（有対有声阻害音）を清音化（無声閉鎖音化）する：例 *bién* ⇒ *apíen*。フンザ方言では、3 人称 Y 類が、否定現在でも否定過去でも、単複の区別を失い、更に 3 人称単数 X 類と形式的に等しくなっている。

(18) BH	*guké*	*kitáapičiŋ*	*šuáik*	*bicán*
	guké	kitáap-ičiŋ-Ø	šuá-ik	b-ican-Ø
	これら:Y	本-PL-ABS	良い-INDF.PL	COP-3PL.Y-NPRS
	これらの本は良い			

(19) BH	*guké*	*kitáapičiŋ*	*šuáik*	*api*
	guké	kitáap-ičiŋ-Ø	šuá-ik	a-b-i-Ø
	これら:Y	本-PL-ABS	良い-INDF.PL	NEG-COP-3SG.X-NPRS
	これらの本は良くない			

現在形で 1〜3 人称複数 H 類が、過去形で 3 人称単数 HM 類、2 人称単数、1〜3 人称複数 H 類が、同形になってしまっているのは、形態音韻論的な帰結であって、中和であるとは考えない（可能性としてはあり得るが、異なった形式になる筈のものが同形になるのとは同じ扱いにしない）。

5.2　ブルシャスキー語ナゲル方言

ナゲル方言は、フンザ方言と合わせて東ブルシャスキー語を構成していると称して構わないくらいに、フンザ方言とは似ており、ヤスィン方言とは目立って異なっている[11]。ナゲル方言のコピュラは、H 類が *bá-*、X 類が *b-*という語幹を取るという点でフンザ方言と共通しているが、単数 Y 類が *d-*という語幹を取る点で異なっている。複数 Y 類は X 類と同様の *b-*である。

表 9：ブルシャスキー語ナゲル方言の直説法コピュラ

	肯定・現在		肯定・過去		否定・現在		否定・過去	
	SG	PL	SG	PL	SG	PL	SG	PL
1	*báa*	*báan*	*báyam*	*bom*	*apáa*	*apáan*	*apáyam*	*apóm*
2	*báa*	*báan*	*bom*	*bom*	*apáa*	*apáan*	*apóm*	*apóm*

[11] ブルシャスキー語を東西に分けるのは、Yoshioka（2012）以降の筆者の考えである。

3 HM	*bái*	*báan*	*bom*	*bom*	*apái*	*apáan*	*apóm*	*apóm*
HF	*bo*		*bom*		*apó*		*apóm*	
X	*bi*	*bió*	*bim*	*bióm*	*api*	*apío*	*apím*	*apíom*
Y	*dilá*	*bicán*	*dilúm*	*bicúm*				

上述した語幹の差以外は、フンザ方言と大きな違いがない。3 人称複数 X 類の接尾辞や、過去形での母音が、やや異なった音を持っているくらいである。

中和に関してはフンザ方言と同様である。Y 類が（単数）X 類と中和する為、語幹の違いも解消されている。

5.3　ブルシャスキー語ヤスィン方言

ヤスィン方言は、シナー語に分断されてフンザ・ナゲルと地理的にも方言的にも大きく異なっている。とは言え、H 類の語幹が *bá-*、X 類・複数 Y 類が *b-*、単数 Y 類が *du-*であるという分布は、全てナゲル方言と共通している（語幹の形はやや異なる）。

表 10：ブルシャスキー語ヤスィン方言の直説法コピュラ

	肯定・現在		肯定・過去		否定・現在		否定・過去	
	SG	PL	SG	PL	SG	PL	SG	PL
1	*ba*	*ban*	*bam*	*bam*	*apá*	*apán*	*apám*	*apám*
2	*ba*	*ban*	*bam*	*bam*	*apá*	*apán*	*apám*	*apám*
3 HM	*bái*	*ban*	*bam*	*bam*	*apái*	*apán*	*apám*	*apám*
HF	*bu*		*bum*		*apú*		*apúm*	
X	*bi*	*bién*	*bim*	*biém*	*api*	*apíen*	*apím*	*apíem*
Y	*duá*	*bicá*	*dulúm*	*bicúm*				

5.4　ブルシャスキー語のコピュラ

3 つの方言を見たが、中和のスタイルには全く差がなかった。この中和は、東西に分化する以前からの現象なのだろうか。

なお、単数 Y 類のコピュラが独自の語幹を持つナゲル方言とヤスィン方言だが、前者が複合時制に現れる助動コピュラでは *dilá* ではなく *bilá* という形式になるのに対し、後者は助動コピュラでも *duá* という形式を取り続ける点で、異なっている。恐らくは、コピュラ独立形で *d-*系列の語根を用いるのが古い形式であり、他の語根からの影響、助動コピュラとしての用法、或いはヤスィン方言に見られる複合動詞内の*-m* 要素[12]などといったポイントのいずれ

[12] 西ブルシャスキー語では複合時制形式の語構成が、動詞の分詞形＋コピュラとなっている。分詞は単純時制の定形動詞から人称接尾辞を除き、形容詞派生接尾辞*-m* を付加した形式である。例えば、*bal-*「落ちる」を用いた現在完了形の「（それ（Y）は）落ちた；(it) has fallen」は、東ブルシャスキ

かが要因となって、フンザ方言のように、独立形でも *b*-系列を用いるように変化して来たのではないかと考えられる。

6　まとめ

本稿では、筆者がこれまでに調査をした北パキスタン諸言語に関して、コピュラの直説法形式がどうなっているのかを駆け足で一覧して来た。4 節で印欧諸語に関して、5 節でブルシャスキー語諸方言に関して対比をし、相同相異を検証した。表 11 では、両節の内容を改めてまとめている。

表 11：北パキスタン諸言語のコピュラ

言語名	有生性の区別	中和の範囲				系統
		肯現	肯過	否現	否過	
カティ	×	——	——	——	——	Nuristani
カラーシャ	○	——	——	——	——	Dardic
コワール	○	——	——	（3 人称無生）数・時制		Dardic
西ブルシャスキー	△	——	——	（3 人称）性・数	（3 人称）性・数	Burushaski
シナー	×	——	——	人称・性・数	——	Dardic
ドマーキ	×	——	——	人称・性・数	人称・性・数	Indic
東ブルシャスキー	△	——	——	（3 人称）性・数	（3 人称）性・数	Burushaski

ブルシャスキー語の場合、ヒト名詞か非ヒト名詞かで語幹が使い分けられており、更にフンザ方言以外では非ヒト名詞でも具象物（X 類）か抽象物（Y 類）かで異なる語幹を用いていた。具象物には動物が含まれ、抽象物には含まれていないという点を考慮すると、コピュラが語幹で有生性に関する区別をしていると見ることもできる。但し、X 類には無生物以外も多く含まれているため、厳密には違った概念が必要であり、カラーシャ語やコワール語の区別とは（同一範疇内の話であったとしても）別物であると言うべきであろう。表 11 では「△」でその箇所を示した。

ブルシャスキー語の非ヒト 3 人称の否定形におけるクラス・数の中和は、幾分偏ったグルーピングを示していた（即ち、複数 X 類を取り零している）が、その背景には具象物（X 類）より抽象物（Y 類）のほうが、数の概念に関してのこだわりの希薄さのようなものがあるのかも知れない。いずれにしても、3SG.X・3SG.Y・3PL.Y が中和するという図式は東西のブルシャスキー語に確認され、ブルシャスキー語と直接に接触している 3 つの印欧語が否定形で中和を見せているという所は見逃せない。即ち、これは現在は東西に分断されているブルシャスキー語が曾ては大きな一塊としての分布をしており、それが今の中間地域や周辺地域の言

一語が BH *balílá* [*bal*+COP]、BN *balí bilá* [*bal*+COP]であるのに対し、西ブルシャスキー語は BY *balúm duá* [*bal-m*+COP]である。

語に接触した結果、影響を及ぼして広まった現象なのではないかと考えられる。[13]

7　おわりに

本論文では、筆者がこれまでに調査をして来た言語全般に話を広げて、コピュラに関する異同を確認した。系統的な、或いは地理的分布による有生性での語根の使い分けや、ブルシャスキー語から広まったであろう否定における中和現象にまで話は及んだが、一方で、更に広範な地域を見ないと、それぞれの現象に関する決定打は放てないことも分かった。但し、これ以上広範囲に調査を広げようとすると、中々個人で賄える規模ではなくなってくる上、地域的にもアフガニスタンや、ディール県[14]、カシミールなどといった、現状で入域困難な地帯になってしまう為、悩ましい話である。

加えて、今回のデータはエリシテーションによって得たものであり、パルーラ語などの周辺言語で見られ（Henrik Liljegren, p.c.）、当該地域でもあり得るであろうゼロコピュラの文が含まれていない。コピュラが形式を持つ文と、ゼロコピュラ文との対比も、今後は考察に含めて行く必要性があるだろう。

謝辞

本論文は、アジア・アフリカ言語文化研究所（AA 研）の言語ダイナミクス科学研究プロジェクトの、フィールド言語学ワークショップ 第 8 回文法研究ワークショップ「コピュラ・存在表現」(2)（2014 年 12 月 6 日、AA 研）、並びに、2nd Kashmir International Conference on Linguistics（2015 年 5 月 4～5 日、University of Azad, Jammu and Kashmir (Pakistan)；館長リーダーシップ経費（平成 27 年度、「国際学会での研究発表：2nd Kashmir International Conference on Linguistics」）による）での発表に基づく。各発表で有益なコメント・質問を下さった方々、論文執筆に当たってコメントを下さった長田俊樹氏、鈴木博之氏に深く御礼申し上げる。また、根気よく調査に協力してくれた各言語のインフォーマントの方々にも心より感謝の意を表したい。言うまでもなく、本稿に残る誤り全ての責任は著者にある。なお、本研究は、東京外国語大学の「組織的な若手研究者等海外派遣プログラム（短期派遣 AA）」（2012 年度、「ドマーキ語／ドマー語の記述言語学的研究」）、日本学術振興会特別研究員奨励費(PD)（課題番号 25・6625、2013 年度、「ドマーキ語／ドマー語の記述言語学的研究」）、国立民族学博物館

[13] コピュラやその周辺でのカテゴリ中和は、様々な言語で見られ、例えば北パキスタンを離れると、コピュラではなく存在動詞だが、否定形における人称カテゴリの中和が、ベンガル語などにも見られる。インドのチョターナーグプル地方においても、非現在時制でコピュラと存在動詞とが中和する現象が語族の壁を越えて分布していることが、長田（1991）で詳細に指摘されている。このように、この手の中和現象自体は北パキスタン特有でも珍しいものでもないが、系統・地理的に密接したカラーシャ語には見られないカテゴリ中和が、コワール語のコピュラには確認できるという点は、注目に値する筈である。

[14] カイバル・パクトゥンクゥー州ディール県。チトラール県の南に位置する、一時期外国人が狙われるテロや人攫いの多かった地域であり、2014 年現在は南方のペシャーワル市からの陸路アクセスが禁じられている。

の館長リーダーシップ経費（平成 26 年度、「ブルシャスキー語、ドマーキ語およびシナー語調査」）、および、所属博物館から受けた研究費によって行われた調査での資料などを用いている。

インフォーマント概要

・カティ語（2008 年に調査）
　　Ināyat ul-Lāh、1979 年生まれ、ルンブール谷シャハナンデ村出身
・カラーシャ語 ルンブール方言（2008 年に調査）
　　Yasīr Arafat、1979 年生まれ、ルンブール谷バラングルー村出身
・コワール語 イシュコマン方言（2008 年から調査）
　　Saīd Ghulām Nabī Wafā、1968 年生まれ、イシュコマン谷チャトルカンド村出身
　　Asīf Zamān、1993 年生まれ、イシュコマン谷チャトルカンド村出身
・シナー語 ギルギット方言（2014 年から調査）
　　Masūd Rehmān、1968 年生まれ、ギルギット市アンファリー村出身
・ドマーキ語 モミナバード方言（2005 年から調査）
　　Xushān、1978 年生まれ、フンザ谷モミナバード村出身
　　Alī Ahmad Jan、1986 年生まれ、フンザ谷モミナバード村出身
・ブルシャスキー語 フンザ方言（2004 年から調査）
　　Essa Karīm、1976 年生まれ、フンザ谷カリマバード町出身
　　Musa Bēg、1979 年生まれ、フンザ谷ガネシ村出身
・ブルシャスキー語 ナゲル方言（2008 年から調査）
　　Ainūr Xayāt、1973 年生まれ、ホパル谷ゴシュシャル村出身
・ブルシャスキー語 ヤスィン方言（2007 年に調査）
　　Arshād Ali、1989 年生まれ、ヤスィン谷ゴジャルティ村出身

略号一覧

ABS	absolutive	INA	inanimate	NPST	non-past
ANI	animate	INDF	indefinite	OBL	oblique
CONJN	conjunctive	INS	instrumental	PFV	perfective
COP	copula	INTR	intransitive	PL	plural
F	feminine	IRR	irrealis	PRS	present
GEN	genitive	M	masculine	SG	singular
H	H-class	NEG	negative	X	X-class
HF	HF-class	NOM	nominative	Y	Y-class
HM	HM-class	NPRS	non-present	1/2/3	1st/2nd/3rd person

参考文献

Edelman, D. I. 1983. *The Dardic and Nuristani Languages (Languages of Asia and Africa)*. Moscow: „Nauka“ Publishing House.

Grierson, George Abraham. 1906. *The Piśāca Languages of North-Western India*. London: The Royal Asiatic Society.

_____. 1919. *Linguistic Survey of India. vol.VIII: Indo-Aryan Family. part II: North-Western Group, Specimens of the Dardic or Piśācha Languages (Including Kāshmīrī)*.

Morgenstierne, Georg. 1926. *Report on a linguistic mission to Afghanistan (Instituttet for sammenlignende kulturforskning, serie C I-2)*. Oslo: H. Aschehoug.

_____. 1947. Metathesis of Liquids in Dardic. (Reprinted in Morgenstierne, Georg. 1973. *Irano-Dardica*, 231–40. Wiesbaden: Dr. Ludwig Reichert Verlag.)

_____. 1974. Languages of Nuristan and surrounding regions. In Karl Jettmar and Lennart Edelberg (eds.), *Cultures of the Hindukush. Selected papers from the Hindu Kush Cultural Conference held at Moesgård 1970*, 1–10. Wiesbaden: Franz Steiner Verlag.

長田俊樹. 1991. 「インド東部チョターナーグプル地方における言語輻合について」『神戸市外国語大学外国学研究』23, 143–77. 神戸: 神戸市外国語大学外国学研究所.

Schmidt, Ruth Laila and Razwal Kohistani. 2008 *A Grammar of the Shina Language of Indus Kohistan*. Wiesbaden: Harrassowitz Verlag.

Trail, Ronald L. and Gregory R. Cooper. 1999. *Kalasha Dictionary –with English and Urdu*. Islamabad: National Institute of Pakistan Studies Quaid-i-Azam University, and Summer Institute of Linguistics.

Вайнрайх, М. 2011. Домааки язык. In Т. И. Оранская, Ю. В. Мазурова, А. А. Кибрик, Л. И. Куликов, and А. Ю. Русаков (eds.), *Языки мира: Новые индоарийские язык*. 165–94. Москва: Academia.

Varma, Siddheshwar. 1978. *Dardic or Pisacha Languages: A Linguistic Analysis.* Hoshiarpur: Vishveshvaranand Vishva Bandhu Institute of Sanskrit and Indological Studies, Punjab University.

Yoshioka, Noboru. 2012. A Reference Grammar of Eastern Burushaski. Unpublished PhD thesis, Tokyo University of Foreign Studies.